

**EDITORA**



## ミッドセンチュリーモダンとの再会。

1940年～60年代、デザインの世界に革新的な波を巻き起こした「ミッドセンチュリーモダン」。EDITORAは、その素晴らしい時代を彩った偉人たちが生み出したプロダクトや時のムードを再編集し、世界へと発信します。

EDITORAの根底に流れるのは、特注家具製作における長年の知見と経験、そしてミッドセンチュリーモダンへの尽きることのない敬意と偏愛です。これらの要素を、日本最高峰の職人の技で具現化します。EDITORAは、ブランド活動を通じて現代における「ミッドセンチュリーモダンとの再会」を果たします。







# TIMELESS FUSION

時は溶け合い、先人たちの思想と共に。

EDITORAの家具は、ただのプロダクトではなく、偉大なる先人たちが積み上げた歴史と共鳴する表現です。わたしたちは、彼らの思想を敬い、その哲学に思いを馳せながら新たな創造を試みます。過去から未来へ、伝統と革新が融合したEDITORA独自の美学が、空間に価値をもたらします。



最高の職人たちによる、作家性と希少性。

EDITORIAは、価値と意味を生む家具製作を行います。日本最高峰の職人たちの技術を限界まで引き出し、惜しみなく注入することで、作家性と希少性、そして最高の品質を担保します。この極めて繊細で深みのある仕事は、EDITORIAのプロジェクトに特別な存在感をもたらします。それは単に空間を彩るだけでなく、潜在的な可能性を引き出し、より豊かな体験をもたらします。EDITORIAの世界を、ぜひ体験ください。





EDITORA

**STYLES**







**VEIN** P.34-35 Frame: White Bronze Plated Steel & Maple / Seat & Back: Upholstery  
 W 590 D 535 H 800 / SH 450 mm P.36-37 Reinterpreted Works of Mathieu Matégot







**GAZELLE SIDE CHAIR** P.38 - 39 Frame: Red Oak / Seat & Back: Upholstery  
W 470 D 520 H 790 / SH 450 mm P.40 - 41 Reinterpreted Works of Dan Johnson

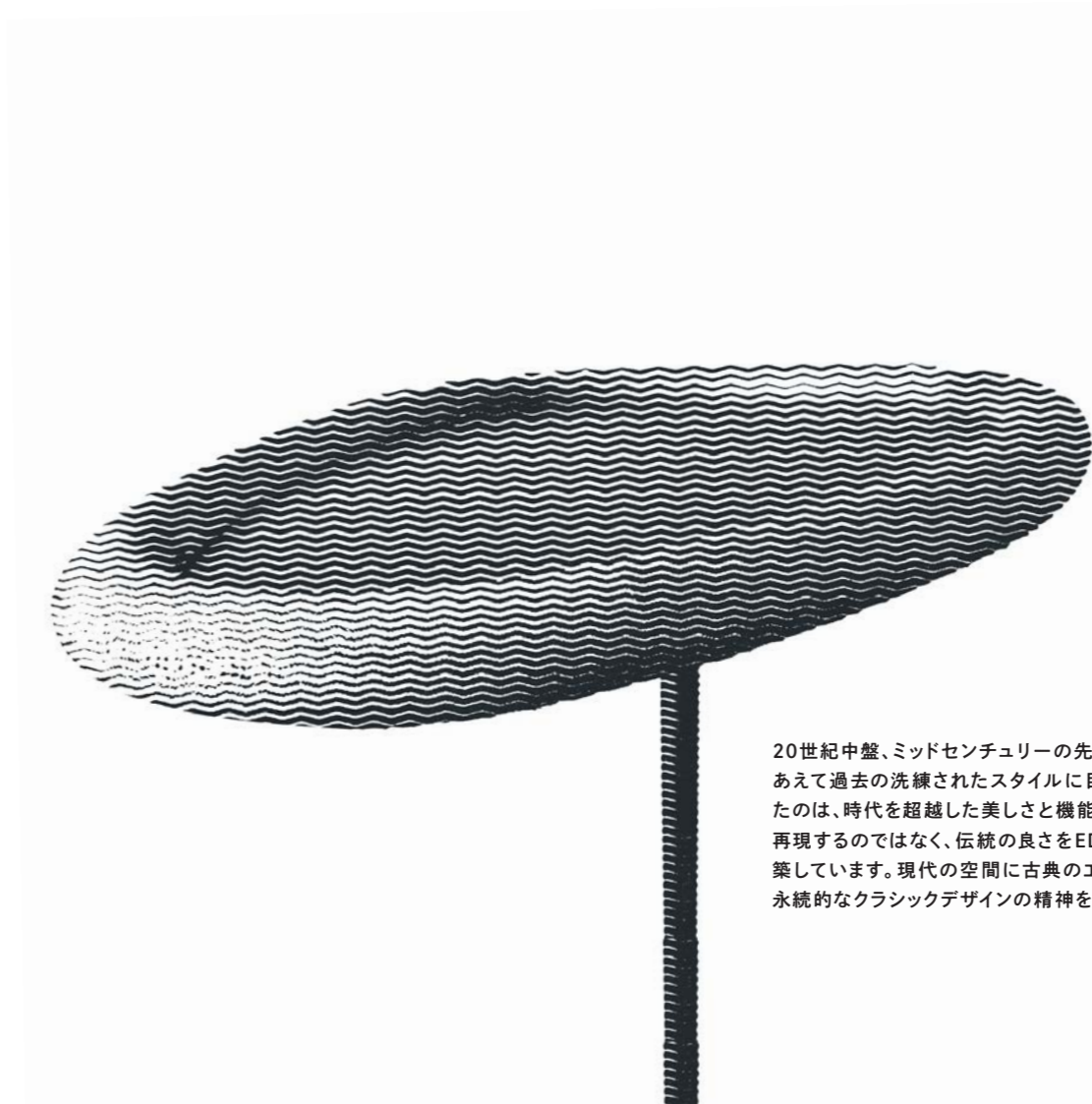
**ROSTRUM (Low Table)** P.76 Top: White Bronze Plated Steel & Maple  
W 550 D 370 H 500 mm Base: White Bronze Plated Steel

**GAZELLE ARMCHAIR** P.38 - 39 Frame: Red Oak / Seat & Back: Upholstery  
W 540 D 520 H 790 / SH 450 mm P.40 - 41 Reinterpreted Works of Dan Johnson





# "Beyond Time"



20世紀中盤、ミッドセンチュリー先進的な動きのなかで、あえて過去の洗練されたスタイルに目を向けた結果生まれたのは、時代を超越した美しさと機能性の融合。単に過去を再現するのではなく、伝統の良さをEDITORIAの解釈で再構築しています。現代の空間に古典のエレガンスをもたらす、永続的なクラシックデザインの精神を体現しました。

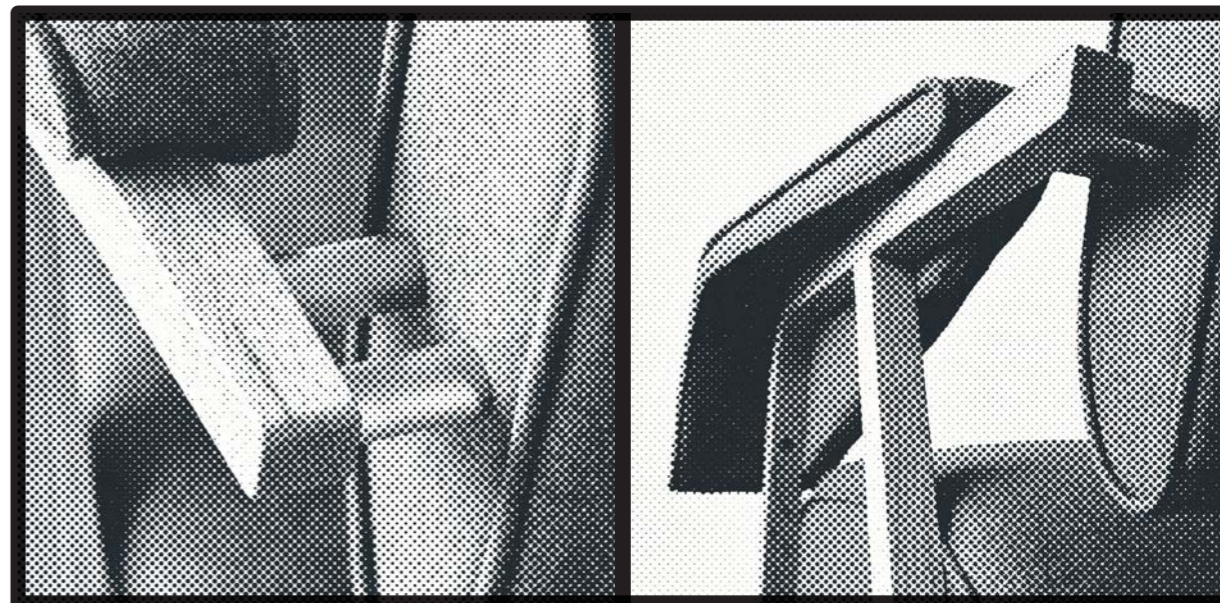




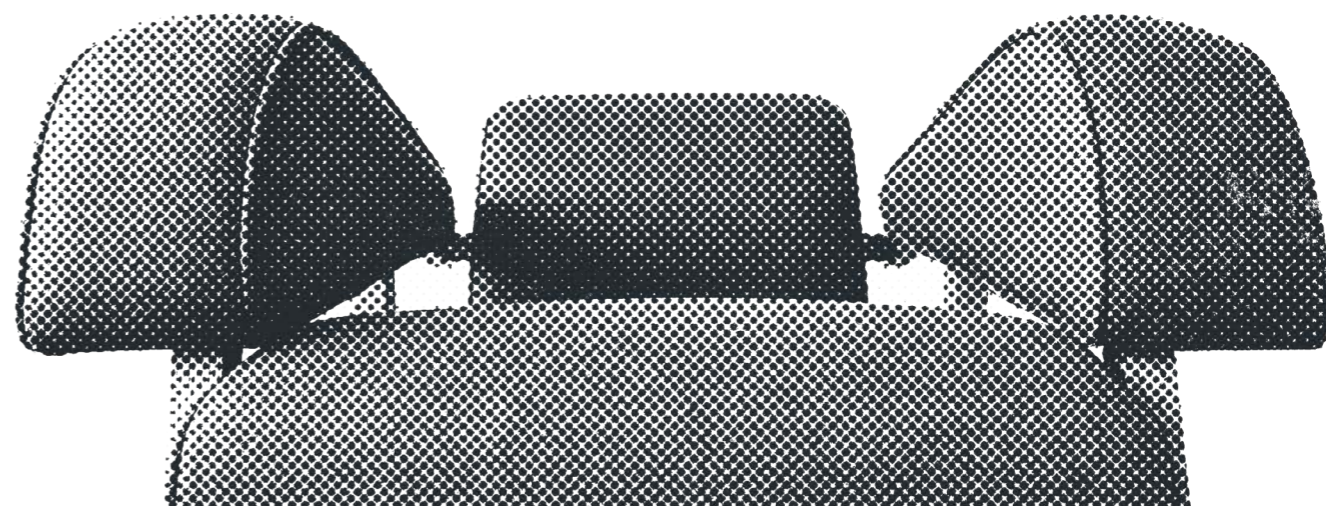
**SULLY -S- (Easy Chair)** P.57 Frame: Red Oak & SUS / Seat & Back: Upholstery  
W 710 D 670 H 650 / SH 400 mm P.56 Reinterpreted Works of Eileen Gray

**FLOUNDER (Low Table)** P.65 Top: Marble / Base: Maple & SUS  
W 1300 D 630 H 380 mm P.64 Reinterpreted Works of Greta Magnusson-Grossman





一見アンバランスなデザインは、不釣り合いな美学と快適性の融合。木製アームと背クッションは、極太スパーサーによって浮遊感を演出。肉感ある背、座、肘掛けクッションがそれぞれ独立し、存在感を放ちます。小ぶりで丸みを帯びた独特のフォルムは、空間にあらたなリズムをもたらします。







**FLOUNDER (Low Table)** P.65 Top: Marble / Base: Maple & SUS  
 W 1300 D 630 H 380 mm P.64 Reinterpreted Works of Greta Magnusson-Grossman







# "Sublime Delight"

**THE TRI 2P SOFA**

W 2100 D 920 H 700 / SH410 mm

P.52-54

P.55

Frame: White Bronze Plated Steel / Seat & Back: Upholstery

Reinterpreted Works of Le Corbusier





マチのないひだ寄せ技法で仕立てられたクッションは、座り心地の極みを体現。背もたれと座面、それぞれ異なる中材を使用し、理想的なサポートを実現しています。金属部分は、アームから背面にかけてのパイプのシームレスな曲げ加工と極限まで抑えた溶接盛りで洗練さを演出。一度座ったら立ち上がれないほどの極上の座り心地です。





**MONK SIDE CHAIR**  
W 430 D 525 H 785 / SH 445 mm

P.42 Frame: Red Oak / Seat & Back: Upholstery  
P.44-45 Reinterpreted Works of Marcel Gascoïn

**MONK ARMCHAIR**  
W 540 D 525 H 785 / SH 445 mm

P.43 Frame: Red Oak & White Bronze Plated Steel / Seat & Back: Upholstery  
P.44-45 Reinterpreted Works of Marcel Gascoïn





**DESSUS 4**  
W 800 D 800 H 380 mm

P.62 Top: Glass & White Bronze Plated Steel / Base: White Bronze Plated Steel  
P.63 Reinterpreted Works of Charlotte Perriand

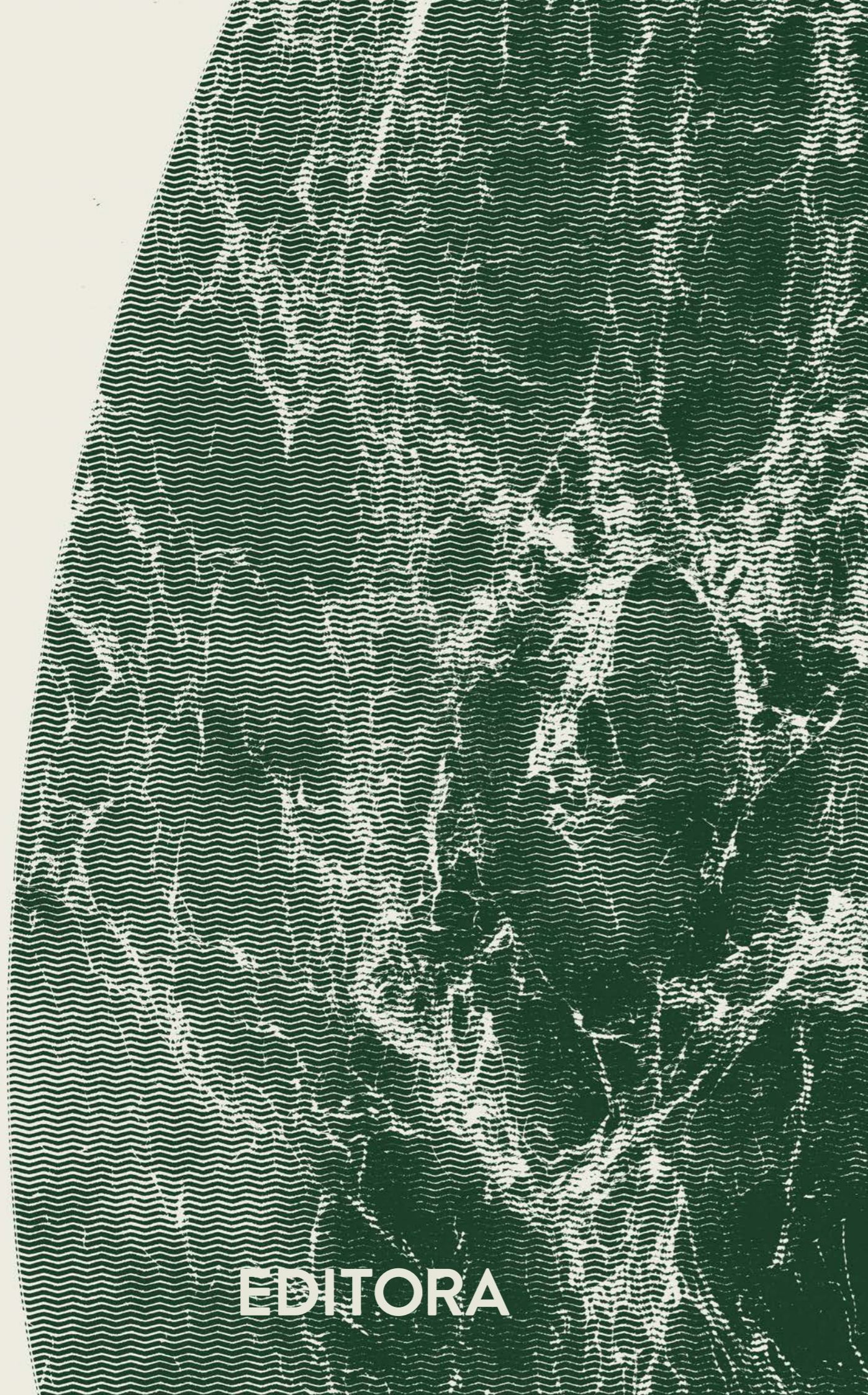


# "Sleek Curves"



従来の概念をくつがえす“しなり”の美学。21mm厚の重厚なガラス天板は、精密に設計されたスチールフラットバーの脚部に意図的な負荷をかけます。“しなり”は、これまでの弱点を逆手に取り、不均一な床面にも対応する革新的な安定性を実現。曲線美と肉厚のフラットバー、きついアールで曲げた金属の造形は、一体成型の困難を職人の溶接技術で克服した賜物です。





**EDITORIA**

## **PRODUCTS**



**PRICE LIST**



# VEIN

金属加工と溶接の職人技によって生まれたこのチェアは、ただ座るだけの役割にとどまりません。見る角度により変化するうつくしさと緻密な構造が一体となったデザインに注目してください。個々のパーツが絶妙に組み合わさった結果、緊張感と安定感が共存する独特のバランスを生み出しています。このデザインは、ハンガリー出身のデザイナー、マシュー・マテゴの「コバカバーナチェア」からインスパイアされました。3次元に曲げられたパイプは加工のむずかしさを物語り、その複雑な構造がチェアの魅力を高めています。

CODE | MM-01

SIZE | W.590 × D.535 × H.800 / SH.450

MATERIAL | Frame: White Bronze Plated Steel & Maple  
Seat & Back: Upholstery







# Mathieu Matégot

Hungary | 1910 - 2001

## マシュー・マテゴからの学び、 コパカバーナチェアの金属フォルム

マシュー・マテゴは1910年、ハンガリーに生まれ、ブダペストのボザールでアートと建築を学んだあと、1931年より活動拠点をフランスに移しました。1939年第二次世界大戦勃発後はフランス軍に加わり、ドイツで捕虜になるも奇跡的に帰還。戦後パリに戻り、自身のアトリエを開設。1945年から1950年代まで家具デザイナーとして最盛期を迎え、1960年代以降はタペストリーのデザインと生産の道を選びました。マテゴが家具を製作していたのは15年ほど。その間に生まれた数々の歴史的な名作は、現代の市場においても高い価値を持ちます。

マテゴのデザインでもっとも革新的なのが「パンチングメタル」の開発です。生産の効率性と芸術的な美学の融合を目指し、金属の板に穴を開けたのです。これにより、金属を柔軟で彫刻的な形状にすることが可能となりました。1940年代後期にはこのパンチングメタルを用いて多くの家具をデザイン。マテゴのパンチングメタルは、家具や照明だけでなくトレイやマガジンラック、ゴミ箱など200型以上におよぶフランスの日用品にも応用されました。

彼の代表作である「コパカバーナチェア」は、この新しい金属加工技術を用いてデザインされました。この椅子の特徴は、一筆書きで描かれたような視覚的な効果。独特の形状と細部のデザインのうつくしさに目を奪われます。また、人間の体に自然にフィットするようなフォルムが、座り心地の良さも提供します。

EDITORAのチェアデザインに、この「コパカバーナチェア」からの影響を明確に見て取ることができます。特にコパカバーナチェアが持つ流れるようなラインや、金属の柔軟な形状を用いたデザインです。マテゴの革新的なアプローチを継承しながら、現代の生活スタイルやニーズを加味した新たな解釈として、EDITORA独自の美学を表現しています。



コパカバーナチェア(1955)





## GAZELLE SIDE CHAIR

CODE | DJ-01  
 SIZE | W.470 × D.520 × H.790 / SH.450  
 MATERIAL | Frame: Red Oak  
 Seat & Back: Upholstery



## GAZELLE ARMCHAIR

CODE | DJ-02  
 SIZE | W.540 × D.520 × H.790 / SH.450  
 MATERIAL | Frame: Red Oak  
 Seat & Back: Upholstery

豊かさを追求したミッドセンチュリーを彩った、ダン・ジョンソンの遊び心とクラシックスタイルのデザイン。このチェアは彼の代表作「ガゼルチェア」への敬意として生まれました。1950年代のアメリカ風情を反映し、優雅さと自然界からインスパイアされた形状。体にフィットするフォルムと機能の融合。EDITORIAのひとつの回答です。





ダン・ジョンソンは第二次世界大戦からの戦後復興期のアメリカで活動したデザイナーで、その業績はイームズやジョージ・ネルソンと並び称されるほどです。しかし彼らが新素材や革新的な製造技術に目を向けていた一方で、ジョンソンは過去のクラシックなスタイルから多くのインスピレーションを引き出しました。彼の作品はミッドセンチュリーの美学を体現しており、中でももっとも象徴的なのが、「ビスカウトチェア」と「ガゼルチェア」です。

「ビスカウトチェア」は、流麗で統一感のあるフォルムと、どこかノスタルジックな雰囲気を感じさせるデザインが特徴で、多くの人を魅了します。「ガゼルチェア」は、その名が示す通り、軽やかさと優雅さを持ち合わせており、その美学は現代でも大きな影響力を持っています。

ジョンソン作品は、EDITORAが大切にしているクラシックなモノづくりの精神と一致しています。特に影響を受けたのは、ジョンソンが持つ古典と現代の融合と、自然と人間の形状を探究したユニークなデザイン思考です。クラシックなスタイルにあたらしい風を吹き込むこと。そして見る人、使う人が心躍る遊び心を忘れないこと。EDITORAがジョンソンから学んだ大きな教訓です。

## Dan Johnson

America | 1918 - 1979



ビスカウトチェア(1950年代)

クラシックの引用とモダンの融合。  
ダン・ジョンソン思考からの教訓







## MONK SIDE CHAIR

1940～50年代のフレンチスタイルを現代の視点で解釈。座面の軽やかさを採り入れブレンドすることで、どの環境にも自然に溶け込むデザインを実現しました。後脚の中心部を太らせるというフレンチスタイルの特徴を活かした安定感のある形状を持ちながら、洗練された印象も有します。存在感と柔軟性を兼備したチェアです。

CODE | MG-01  
 SIZE | W.430 × D.525 × H.785 / SH.445  
 MATERIAL | Frame: Red Oak  
 Seat & Back: Upholstery



## MONK ARMCHAIR

アームチェアにもフレンチスタイル的なこだわりが細部に宿ります。背面の軽やかさを引き立てることで、アームと後脚の結合部に浮遊感を生み出しました。そして随所に散りばめられたディテールは、フレンチスタイルの魅力を明確に反映しています。アンティークを愛する方々にも手に取っていただける自信作です。

CODE | MG-02  
 SIZE | W.540 × D.525 × H.785 / SH.445  
 MATERIAL | Frame: Red Oak & White Bronze Plated Steel  
 Seat & Back: Upholstery





## マルセル・ガスコアン。時代を超えた フランスミッドセンチュリーの巨星

20世紀中頃のフランスを代表する家具デザイナーで、特に戦後の復興期に重要な役割を果たしたマルセル・ガスコアン。彼はフランスミッドセンチュリーの象徴的な存在であり、そのデザインは今日でも多くの人々に影響を与えています。また、コルビジェやジャン・ブルーヴェ、シャルロット・ベリアンなどが参加したフランスの現代芸術家協会(UAM)のメンバーとしても知られています。

フランス復興都市省の建築家・インテリアデザイナーとして働き、戦後の住宅難を解消するために家具の設計・施工に尽力したことからキャリアは始まります。モジュール式の収納ユニットとそれに合わせた木製家具のセットをフランスの家庭に定着させ、すっきりとしたうつくしさと機能性を追求しました。

ガスコアンのデザインは、機能主義とモダニズムの理念に基づき、特に限られた空間を効率的に利用するためのクレバーな解決力で知られています。自然な素材を積極的に使用し、質素ながらもうつくしいデザインを求めました。「住宅の再構築」をデザイン哲学とし、都市空間でも居住者が快適に生活できるように、家具を通じて空間を最大限に活用する方法を提案しました。

なかでも特に著名なのが「Cチェア」です。軽量でありながら堅牢で、木製の自然な質感を活かした仕上げ。そして座り心地のよい座面や背もたれの角度とエレガントなフォルム。第二次世界大戦後のフランスの物資不足という背景を反映して、小さなスペースでも使用でき、機能とうつくしさが競い合うことなく、完璧に融合したデザインといえます。

ガスコアンのデザイン哲学と実用性を受け継ぎつつも、EDITORAのチェアは独自の解釈とモダンな感覚を加え、現代の生活環境に適したプロダクトを提供します。「Cチェア」は、時代を超えてEDITORAの家具デザインに多大な影響を与えてくれます。



Cチェア(1947)

## Marcel Gascoïn

France | 1907 - 1986



# POMPOUS 3P SOFA

ジャン・ロワイエが1947年に母親の邸宅改装のためにデザインした「ポーラベア」ソファは、豊かな形状と彫刻的なうつくしさで知られます。伝統的な工法と洗練されたデザインが溶け合い、時代を超えたユニークな魅力を放っています。EDITORIAのソファもまた、手作業による精巧なディテールで、親しみやすさとともに重厚な存在感を醸します。自然や動物を連想させるロワイエのデザイン思想を具現化した有機的フォルムに注目してください。



CODE | JR-01  
 SIZE | W.2200 × D.1100 × H.740 / SH.420  
 MATERIAL | Frame: Oak  
 Seat & Back: Upholstery





## POMPOUS 1P SOFA

ロワイエのデザイン哲学は「自由な表現と探究心」。構造や納まりに対する理解や専門的な知識が、大胆で独創的な形状を生み出しました。それを実現させるこの手法は、合理性を追求したジャン・ブルーヴェとは対照的なスタイルを形成しています。EDITORIA もまた、実際にロワイエの作品集に掲載されていた木部だけの写真をヒントに木枠を組み上げ、ウレタンを肉付けし彫刻のように削りだす、職人技でしかなしえない技法で製作しています。

CODE | JR-02

SIZE | W.760 × D.830 × H.685 / SH.420

MATERIAL | Frame: Oak

Seat & Back: Upholstery





## POMPOUS COUNTER CHAIR

ロワイエの家具は、新素材による機械生産を用いず、代々受け継がれた伝統的な工法により製作されます。これは当時の他のデザイナー、たとえばイームズやエーロ・サーリネンが成形合板やグラスファイバーなどの新素材を使用していたこととは一線を画しています。EDITORAの有機的でふくよかな曲線もまた、職人の手によって削り出される緻密なディテールで、ロワイエの作品のごとく彫刻的なうつくしさを表現しています。

CODE | JR-03  
 SIZE | W.570 × D.560 × H.990 / SH.780  
 MATERIAL | Frame: Oak  
 Seat & Back: Upholstery

## Jean Royère

France | 1902 - 1981



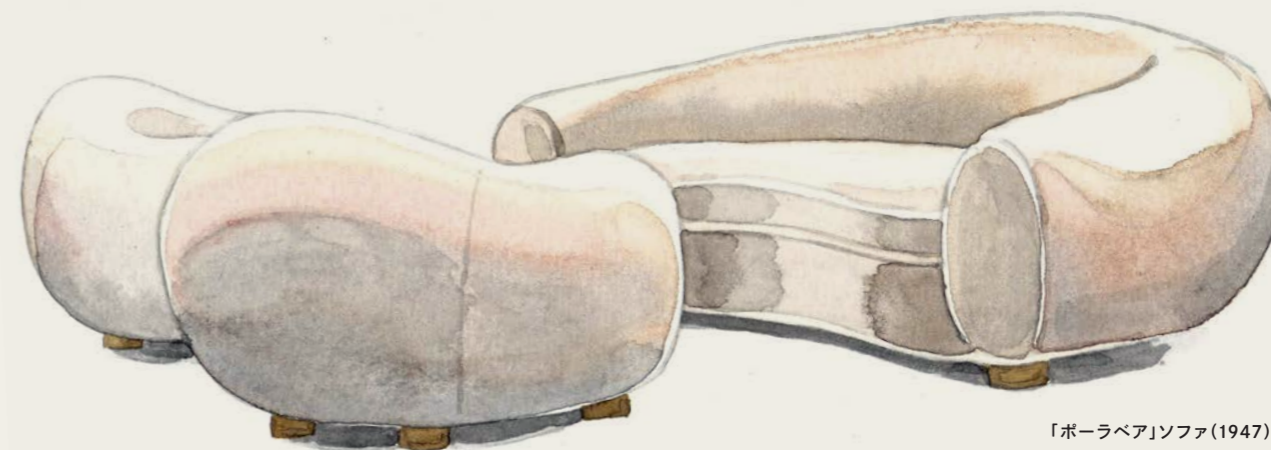
### ユーモラスと伝統。ジャン・ロワイエの感性

ジャン・ロワイエは20世紀フランスミッドセンチュリーを代表するデコレーター・家具デザイナーです。その個性的な作品は一部ではカリスマ的なステータスを持つほど。彼は1902年にフランスのパリで生まれ、当初は貿易家としてのキャリアを進めていましたが、29歳でインテリアデザインの世界へと転身。フォーブル・サン・アントワヌの家具工房で、パリで受け継がれてきた最高峰の技術を学びます。彼はすぐに独自性を発揮。自由な発想とエレガンスに魅了された富裕層が顧客となり、さらに中東、南米の王族がパトロンになるなど華々しい国際的なキャリアを築きました。

ロワイエが高く評価される理由は、そのデザイン哲学と特徴的なデザインアプローチにあります。彼は機能的な価値だけでなく、感覚的な楽しさも重視し、ユーモラスで親しみやすさを取り入れることで、一見、贅を尽くしたインテリアでも人々が日常生活の中でリラックスして楽しむことができる空間をつくり出しました。また彼の作品は、独創的な形状と豊かな色彩、そして高品質な材料を用いたことで知られています。

なかでも象徴的なのが「ポーラベア」ソファ。こだわり抜かれた生地選びと丸みを帯びた形状が、北極の氷の上を歩くポーラベア(しろくま)を思わせることから名付けられたそうです。大きなサイズ感と色彩は、視覚的なインパクトだけでなく、極めて快適な座り心地を実現しています。「ポーラベア」シリーズは多くのアート蒐集家やセレブリティに愛され、一部ではステータスシンボルともなっています。衰えない人気は、ロワイエの時代を超える洗練されたデザインと高いクラフツマンシップの証左と言えるでしょう。

EDITORAのPOMPOUSシリーズは、ロワイエの「ポーラベア」シリーズの影響を受けたプロダクト。オーバーサイズで丸みを帯びたフォルム、ユーモラスさと遊び心を含んだデザインアプローチで表現しました。有機的な曲面は、すべて職人の手によって削り出されたフォルム。ロワイエの作品集に掲載されていた木部だけの写真をヒントに木枠を組み上げ、肉付けされたウレタンを手仕事によって彫刻のように成形。彼がこだわり続けた技法を継承しています。



「ポーラベア」ソファ(1947)



# THE TRI 2P SOFA

数十年使い込まれてクタクタに劣化してもなお深まる愛着。そんな魅力を備えたコルビジェの「LC2」「LC3」から着想を得たソファは、経年変化を楽しむためのアーティファクトです。一見、崩れたような形状は、熟練した職人の手による仕上げ。印象的なカバーリングの表情はマチのない「ひだ寄せ」という技法によるもの。背・アームクッション・座クッションはそれぞれ中材の構成を変えて、最上級の座り心地を追求。パフッとソファに沈み込めば、立ち上がるのをためらうほどの極上な心地です。



CODE | CG-01  
 SIZE | W.2100 × D.920 × H.700 / SH.410  
 MATERIAL | Frame: White Bronze Plated Steel  
 Seat & Back: Upholstery





## Le Corbusier

Switzerland | 1887 - 1965



LC4 シェーズロング(1929)

### モダニズムの旗手ル・コルビジェ、EDITORAに流れる理念

ル・コルビジェは20世紀を代表する建築家であり、都市計画家であり、デザイナーでもあります。本名はシャルル=エドゥアール・ジャンヌレ=グリ。スイスに生まれましたが、その大半をフランスで過ごしました。彼は芸術学校で建築を学び、名建築家オーギュスト・ペレの助手を経て、モダニズム建築の象徴とされる「新しい建築の5原則」を掲げました。

建築家としてだけでなく、家具デザインでも名を馳せており、特に「LCシリーズ」は現在でも高く評価されています。なかでも「LC4」シェーズ・ロングは、人間の形状に合わせてデザインされた最初の家具のひとつで、モダンで流線型的なデザインと、快適性と機能性を追求した結果として誕生しました。「家具は家の装

置であるべきだ」という考え方にもとづき、そのデザインは空間と調和し、人間の活動を支えるものとされています。

また「LC2」や「LC3」というソファも、ル・コルビジェの代表作で、これらもまた彼の家具装置の一部として設計されました。革新的な金属フレームを使用し、建築的で洗練されたうつくしさを体現しており、そのデザインと機能性から、現代のインテリアデザインにおける不朽のクラシックとされています。

コルビジェの幾何学的で純粋なデザイン、空間と人間の活動への配慮、革新的な構造の利用、人間の体形にフィットした快適さの追求、これらすべてがEDITORAの家具デザインの基礎となっています。モダニズムの理念はEDITORAの中に生き続けています。



## 新と旧、形と機能の調和。 アイリーン・グレイのまなざし

アイリーン・グレイは、アイルランド出身の建築家・デザイナーで、モダンデザインの先駆者として20世紀初頭に活躍しました。彼女はロンドンのスレイド美術学校で芸術を学んだのち、パリに移住。日本人学生の菅原精造から学んだ漆工芸を用いた家具とインテリアデザインで評価を得ました。

彼女のデザイン哲学は物事の本質に迫ること。美的魅力だけでなく機能性と快適さも重視しました。その結果、シンプルでありながらも洗練され、個々の要素が統合された全体的なうつくしさを持つ作品が生まれました。また彼女は、インダストリアルデザインの素材と伝統的な工芸技術を組み合わせ、あらたな素材を使用して調節可能な家具をつくり上げました。ステンレススチール、アルミニウム、ガラスといった当時の新素材を用いて、アールデコや東洋のデザインの影響を受けたうつくしい形状に仕上げたのです。代表作「E-1027サイドテーブル」や「ピベンダムチェア」は現在でも絶大な賞賛を受けています。



## Eileen Gray

Ireland | 1878 - 1976

「ピベンダムチェア」は、タイヤメーカー（ミシュラン）のキャラクターから名前を取り、タイヤを積み重ねたような形状が特徴。ボリュームのあるクッションが座った人を包み込むユニークな構造です。その豪華さとシンプルさ、革新性が評価され、モダニズムデザインの象徴として認知されています。

EDITORAのチェアは、フォルムと機能の調和を追求しています。座る人の快適性を最優先に設計し、グレイの「ピベンダムチェア」に見られるあたらしい素材や技術への敬意を持って取り入れています。挑戦的な形状ながら、グレイのユーザー中心のアプローチに見た美学を具現化しています。



ピベンダムチェア(1929)



# SULLY

アイリーン・グレイの別荘「E1027」で使われていた椅子「ノンコンフォーミスト(非協調主義者)」からインスピレーションを得たこのモデルは、一見不安定なバランスの中に座り心地と機能性を隠しています。木アームとクッションの固定には極太のスペーサーを用いて浮遊感を出し、肉感ある背・座・肘置きクッションがそれぞれ独立した存在感を有しています。全体的な丸みと独特の存在感は、非協調主義的なムードを以て空間に新たなハーモニーを創造します。

### SULLY

CODE | EG-01  
SIZE | W.790 × D.770 × H.700 / SH.430  
MATERIAL | Frame: Red Oak & SUS  
Seat & Back: Upholstery

### SULLY-S-

CODE | EG-02  
SIZE | W.710 × D.670 × H.650 / SH.400  
MATERIAL | Frame: Red Oak & SUS  
Seat & Back: Upholstery





# ARARE

2次元成形合板技術のマスター、アルヴァ・アアルトからのインスピレーションを受けたEDITORAのチェアは、シンプルで洗練されたデザインが特徴です。アアルトが開発した"L-レッグ"技法の精神を受け継ぎ、2次元成形合板で構成されています。同一形状の7本の成形合板は、1本のコットンテープで編み込まれ、3次元的な形状を形成。これにより一体成形に勝る柔軟性と快適性を生み出します。両端の微妙な崩れもEDITORAの美学。これが成形合板チェア、伝統と革新の融合です。

CODE | AA-01

SIZE | W.460 × D.500 × H.710 / SH.440

MATERIAL | Frame: Molded Beech Plywood  
Seat: Upholstery / Back: Fabric Tape

## Alvar Aalto

Finland | 1898 - 1976

### アルヴァ・アアルト。自然との調和を追求した革新者のデザインとレガシー

フィンランドの偉大な建築家でありデザイナー、アルヴァ・アアルトは、有機的な形状と自然素材への敬意から生まれる人間中心のデザインで称賛されています。

アアルトは人間と自然の調和を重視するデザイン思想の草分けとなりました。その探求の核として彼が革新したのが、合板の活用でした。合板は軽量かつ頑丈で、加工も容易な素材ですが、アアルトはこの素材を通じて人間の生活と自然の要素を統合するあたらしい可能性を追求しました。なかでも"L-レッグ"は特筆すべきです。一枚の合板をL字形に曲げるこの技術は、強度と美学を一体化させ、アアルトのデザイン思想を体現しました。数多くの試行錯誤を経て生み出されたL-レッグは、彼の家具デザインの中核的な技術となり、以降の多くの作品に影響を与えました。



41 アームチェア パイミオ (1932)

その代表例として挙げられるのが「41アームチェア パイミオ」です。このチェアは、有機的な形状とL-レッグ技術の使用により、アアルトのデザイン理念が反映されています。このデザインにより、家具は単なる使用品から美的感動を与える存在へと進化しました。その優れたデザインと快適さは、他のデザイナーやブランドに大きな影響を及ぼし、EDITORAのチェアでもその影響が明確に見られます。

アアルトのL-レッグ技術と41アームチェアパイミオのデザインは、形状、機能性、材料の使用法、そして人間との関わり方という、デザインと建築の新たな可能性を示しました。その影響力は現代に至るまで続き、私たちが生活空間をどのように考え、体験するかに影響を与えています。アアルトの作品から得られる洞察は多く、彼の視点と手法は今後もデザインと建築の重要な参考点となるでしょう。



# DESSUS 6

1953年、シャルロット・ペリアンがデザインした「オンブルチェア」は、初期モデルの強度問題から始まりましたが、彼女の美学は数十年の試行錯誤を経て製品化されました。最初の10mm厚のプロポーションから〈天童木工〉〈カッシーナ〉といった各メーカーがそれぞれの時代に対応した改良を重ね、現行のカッシーナ版は17mm厚に。このチェアからインスピレーションを受け、EDITORAは「しなる」という構造挑戦をガラス天板テーブルへと転用。強度を持たせつつも、美しいしなりを生み出すこのテーブルは、過去から学び、未来へと繋げるEDITORAの挑戦です。



CODE | CP-01  
 SIZE | W.1500 × D.700 × H.380  
 MATERIAL | Top: Glass & Bronze Cast  
 Base: Bronze Plated Steel  
 ※サイズオーダー要相談





# DESSUS 4

シャルロット・ペリアンの「オンブルチェア」から得た着想と、EDITORAの職人たちの技術力が融合したガラス天板テーブル。重厚なガラス天板がスチール脚部に力を与え、流麗な「しなり」を生み出します。溶接と仕上げの技術を最大限に活かし、ガラスと金物を挟み込む形で、構造体のうつくしさを全面に押し出しました。仕上げは銅メッキスチールとホワイトブロンズメッキスチールの2種類で、それぞれが独特の風格を与えます。

CODE | CP-02

SIZE | W.800 × D.800 × H.380

MATERIAL | Top: Glass & White Bronze Plated Steel

Base: White Bronze Plated Steel

※サイズオーダー要相談



## Charlotte Perriand

France | 1903 - 1999

### シャルロット・ペリアンから継承した日本の美意識と革新的デザイン

フランスのモダニズムデザインを牽引したシャルロット・ペリアンは、建築家ル・コルビジエのアトリエで学んだ経験も持ちます。ペリアンがデザイン界で高く評価された理由のひとつは、彼女がモダニズムデザインの理論を独自の視点で解釈し、それを具現化した作品をつくり出したことにあります。特に日本の文化との結びつきはとて深く、その影響は大きなものです。

1930年代に初めて日本との関わりを持ったペリアンは、日本文化の精神性とデザイン思想に魅了されました。その後の彼女の作品は、自然との調和、素材への敬意、人間中心のデザインという日本の美学を取り入れたものが多く、それらは彼女の作品全体に見ることができます。

その最たる例が、1953年にデザインされた「オンブルチェア」です。この椅子は日本の座法に影響を受け、木材の美しさを最大限に活かすためにデザインされました。強度や当時の技術的側面から初期の作品は量産に至らなかったものの、素材の特性を活かしながら技術的な試行錯誤がくり返され、数十年を経て再販されました。

この「オンブルチェア」の思想はEDITORAのテーブルにも受け継がれています。テーブルは「しなる」という構造的デメリットをプラスに転用しており、21mmのガラス天板の重量により脚部に荷重をかけ、曲げ部分を少しだけしならせることで、多少不陸のある床とも食いつく構造になっています。また、ガラス天板を円錐型の金物と脚部で挟み込み、構造体そのもののうつくしさも追求。ペリアンの美学と東西のデザイン思想の融合を具現化したプロダクトです。



オンブルチェア (1955)



# Greta Magnusson-Grossman

Sweden | 1906 - 1999



グラスホッパーランプ(1947)

## うつくしいプロポーションと細部へのまなざし。 継承されるマグヌッソンの哲学

グレタ・マグヌッソン・グロスマンは1906年にスウェーデンに生まれ、建築・工業デザイン、インテリアデザインの分野で多大な功績を残した人物です。スウェーデンの芸術工芸学校で木工と陶芸を学びましたが、その才能は早期に認知され、1933年のストックホルム工芸協会の家具コンペディションでは女性デザイナーとして初の入賞を果たします。この成功を機にストックホルムに自身の店とワークショップを開設。その後は夫とともにアメリカへ移住。ロサンゼルスで家具と照明のデザイン、さらに住宅建築におけるあらたなキャリアを築き上げました。彼女のデザインは多くのハリウッドスターから支持され、多数の企業から依頼を受けて数多くの作品を残しました。特にカリフォルニアの家具メーカー〈グレン・オブ・カリフォルニア〉での仕事は、彼女のキャリアでもっとも広く知られるものです。EDITORAのテーブルは、ここで生まれた「コーヒーテーブル」(通称:アイロン台)から影響を受けています。

マグヌッソンは、スウェーデンのシンプルで洗練された美学と、アメリカのモダニズムを融合させたデザインを創出しました。また、男性主導のデザイン業界で成功を収めた数少ない女性デザイナーとしても広く評価されています。

彼女の作品群の中でも最も有名なもののひとつが「グラスホッパーランプ」です。このフロアランプは細い鉄の脚と独特な形状のシェードが特徴。彼女の作品の中でも特に卓越したデザインであり、マグヌッソンの照明デザインの代表作となっています。

「コーヒーテーブル」(通称:アイロン台)に感じられる造形美と「グラスホッパーランプ」に見る細部へのこだわりが、EDITORAのテーブルデザインに反映されています。



# FLOUNDER

1952年にグレタ・マグヌッソン・グロスマンによってデザインされた「コーヒーテーブル」(通称:アイロン台)に触発されて誕生したテーブル。原型のユーモラスなエッセンスを継承しつつ、大理石、スチールロッド、木の丸棒を用いて洗練された印象をつくり出しました。特筆すべきは、天板と脚の固定を特注の円盤プレートとマイナスネジを使用して上下で挟み込む構造。脚部の木の変形リングは手作業によるもので、触れるとその断面が完全な正円ではないことがわかります。360度、どの角度から見てもフォルムのうつくしさを感じていただけるはずです。

CODE | GG-01

SIZE | W.1300 × D.630 × H.380

MATERIAL | Top: Marble & SUS  
Base: Maple & SUS



# EMILE

洗練された線を成すスチールフラットバーの脚、堅固さを誇るノックダウン構造のフレームは、構築の人、ジャン・ブルーヴェの影響を彷彿とさせます。その頑強なフレームに対比するように、天然木の化粧合板天板が豊かな色合いとあたたかみをもたらします。世界に直接おもむき選び抜いた木の突板は、手間暇かけて一枚一枚手づくりで製作された、唯一無二の天板です。機能と美、時の流れの温もりが同居したEDITORAのテーブルです。



CODE | JP-01

SIZE | W.2000 × D.850 × H.720

MATERIAL | Top: Fumed Cherry Veneer

Base: White Bronze Plated Steel

※サイズオーダー要相談





## Jean Prouvé

France | 1901 - 1984

フランスの建築生産の工業化に不可欠な存在であったジャン・プルーヴェ。建築家、家具デザイナーとしての軌跡は、現代のハイテク建築から家具デザインに至るまで大きな影響を与えています。根底にあるのは彼自身の言葉「私は建築家でも技術者でもない。工人だ」という信念であり、素材と対話しながら合理的で無駄のない構造を追求する哲学です。

彼のキャリアは金属工芸家から始まりました。1930年代になると、あらたな素材としてスチールを活用し、その可能性を追求。これが彼の作品、特に家具デザインに新たな次元を加えることになります。

その代表作が「アントニーチェア」です。金属という新素材への理解と、その素材を活かすための独自のデザインアプローチが見事に結実。まさに「機能美」を体現した作品といえます。

EDITORAのテーブルデザインにも彼の哲学は深く流れています。プルーヴェの機能性と美のバランス、そして合理的な構造思考は、EDITORAのテーブルデザインの中心です。

彼が建築家、家具デザイナーとしてのキャリアだけでなく、ナンシー市長や大学教授を歴任し、戦後復興計画の一部としてプレファブ住宅を考案するなどの社会的役割を果たしたのも忘れてはならない事実です。これらは彼の多面的な才能を示すもので、そのすべてが彼の持つ強力な影響力を裏付けています。

EDITORAは彼の哲学を受け継ぎ、製品を通じて価値を提供し続けることを目指しています。プルーヴェの精神はEDITORAの仕事の永遠の指針であり、あたらしい創造へと導いてくれるものです。

ジャン・プルーヴェ。  
工人の哲学から紡がれる機能と美



アントニーチェア (1954)







## CERRADO FLOWER TABLE

ジョゼ・ザニーネ・カルダスのインスピレーションを受けたこの鉢植え置きは、不規則と規則性が調和したユニークなデザインが特徴。一筆書きのような金属ロッドとリノリウム天板、円弧型のガラスが織りなす絶妙なバランス。初期カルダス作品へのオマージュとして積層合板を使用し、一つに見える金属ロッドは曲げ部分と直線部分を緻密に溶接・仕上げ。困難な加工・溶接過程を乗り越えたどり着いた自慢のフォルムです。EDITORAの職人技術とカルダスの遺産が結びついたあらたな美学です。

CODE | JC-01

SIZE | W.520 × D.550 × H.500

MATERIAL | Top: White Bronze Plated Steel & Glass & Linoleum Plywood  
Base: White Bronze Plated Steel

## ジョゼ・ザニーネ・カルダスから継承する、 自然素材への敬意と職人技術への信頼

独学で建築とデザインを学んだジョゼ・ザニーネ・カルダスは、自然素材の持つ魅力をたくみに活かし、木を彫刻のような家具に変えることで知られています。1964年、政治の波乱に翻弄された故郷ブラジルで、彼は大学の職を追われ、自然豊かなノヴァヴィンサへと避難しました。そこで彼は、森林の破壊という厳しい現実と直面し、地元の職人が倒木を用いて船や家具をつくりだす様子からインスピレーションを受けます。そうして生まれたのが「Móveis Denúncia (抗議の家具)」シリーズ。環境への深い敬意と森林破壊への静かで力強い反対声明です。

若くしてリオデジャネイロで建築模型の工房を開設し、モダニズムの巨匠たちと肩を並べた彼は、1949年に「Móveis Artísticos Z」を設立。機能的でつつましい合板家具の生産を開始します。流麗な曲線が特徴で、形と機能の融合によるユニークなデザインは中流階級の家で愛されるようになりました。

カルダスのデザインは、直感と自然に対する熱い想いから生まれます。1989年にはその功績がバリの装飾美術館で大規模展示され、1991年にはブラジル建築士協会から名誉建築士の称号を授与されるという非凡な成功を収めました。技術的な訓練を受けていなかったカルダスですが、天賦の才と解決へのアプローチは、シーンからも世界的に高い評価を受けています。

## José Zanine Caldas

Brazil | 1919 - 2001

自然と共生し、人間と環境が共鳴するような生活を追求したカルダスの哲学は、今日のデザイン業界においてもあたらしい標準を築きました。彼の作品は機能性を追求した「Móveis Artísticos Z」の時代から始まり、森の叫びを形にした「Móveis Denúncia」まで変わらぬ美学で一貫しています。

芸術、社会、環境への深い理解を持つカルダスの生涯は、単なる家具や建築を超えた、持続可能な世界への憧れを形にしたものです。EDITORAの家具もまた、自然素材への尊重とユニークネス、職人技術への敬意を色濃く表現することで、カルダスの精神を継承していきます。



アームチェア(1950年代)



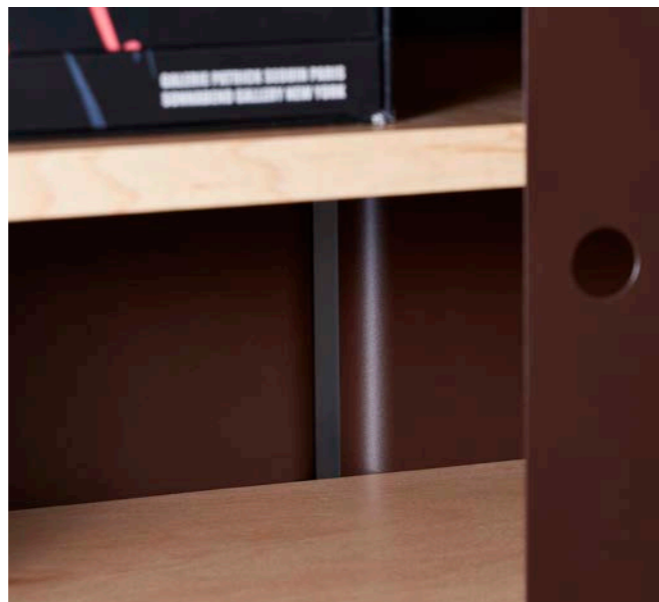
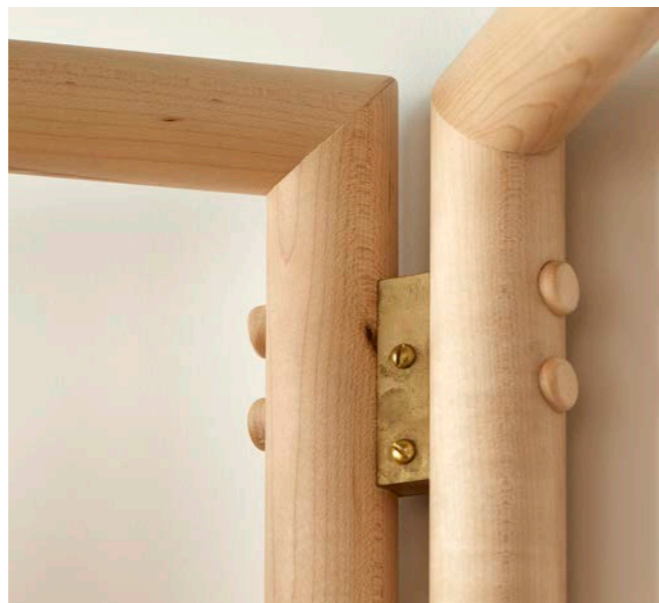
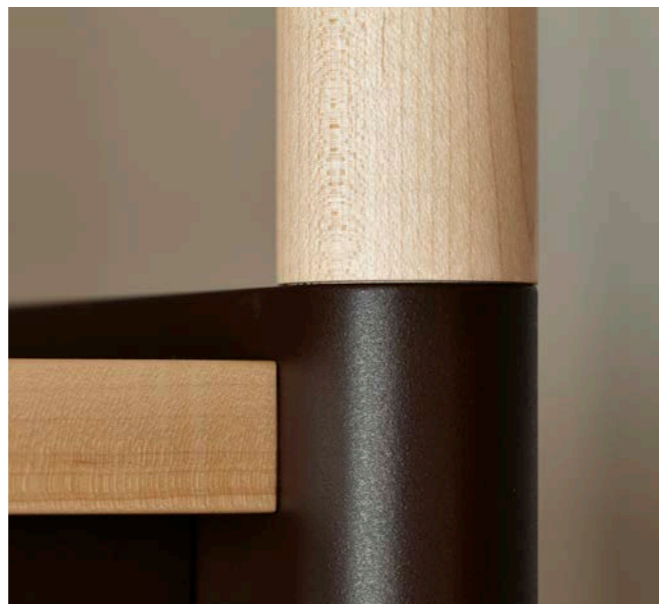
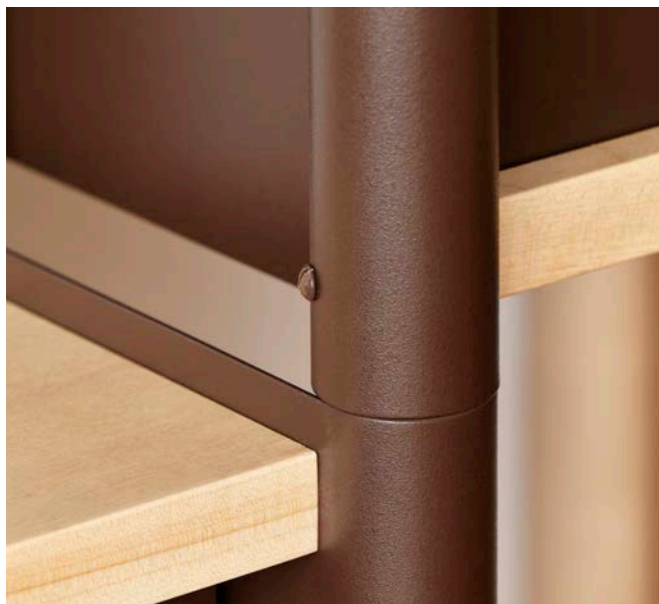
# BIOMBO

ミッドセンチュリーデザインへの深い敬意と独自の現代感覚が融合した壁面シェルフ。中井太郎の屏風型キャビネットからインスピレーションを受けて制作しました。主要な構造要素は、ハードメープルの丸棒を屏風型に配置し、実現までに1年半を要した特殊な三方留めの工法によって強度を持たせています。真鍮のスペーサーは無垢の削り出し。ユニット数のカスタマイズも可能で、あらゆる空間にフィットします。



CODE | TN-01  
 SIZE | W.2660 × D.465 × H.2040  
 MATERIAL | Frame: Maple  
 Storage: Baked Finish Steel  
 Spacer: Brass





## Taichiro Nakai

Japan

### 中井太一郎の伝説を現代に再現。EDITORAの壁面シェルフ

中井太一郎。戦後の日本における工業デザインを象徴する存在とされ、国際的な評価を得たデザイナーであるにもかかわらず、歴史にその名を多く見つけることが困難な、謎も多き人物です。しかしながら、1950年代のイタリアを舞台に活躍した記録は現存。金属、ガラス、真鍮、木など多彩な素材を用い、ジグザグ構造の金属フレームやあたたかみのある木材の色合いを特徴とするウォールキャビネットなど、特別な美学をもつ作品で知られています。

キャリアのハイライトは、イタリア・カントウの「Selettiva del Mobili」コンペティションへの参加でした。1955年の展示会では、彼のリビングルームのデザインが特別賞を受賞。モダンなデザインに宿るイタリアの感性と日本の純粋さが見事に融合したもので、国際的に大きな注目を集め、大いに賞賛されました。

日本とイタリアの文化を繋ぎ、あらたなデザインの地平を切り拓

いた中井の生き方は、現代のデザイン界においても重要な位置を占めています。

そして現在、中井太一郎の設計にインスパイアされたEDITORAの壁面シェルフが生まれました。歴史から幾分忘れられた存在だった中井の思想への、並々ならぬEDITORAの想いが結実。ハードメーブルの丸棒とスチールの薄鋼板を用い、屏風型に配置。木と金属の精密な組み立てが実現され、それぞれの素材の特性を最大限に活かすべく表現しました。

中井の精神を受け継ぎながらも現代の技術を取り入れたこのシェルフは、各ユニット数のカスタマイズが可能。使い手のニーズに応じた空間を創出します。EDITORAのシェルフは、中井太一郎のレガシーと現代の技術が融合したプロダクトといえます。



モジュラーシェルフ(1955)





## ROSTRUM

ミニマルな形状に有機的な風合いが融合、内に宿る重厚感と軽快さが対比を生み出すサイドテーブル。180mmφのスチールロッドを輪切りにし、その上から細いパイプを貫通させ、裏側から溶接。その技巧と繊細な仕上げは職人技でしか成しえません。天板は、鉄板の上にもう一枚の薄い鉄板を重ね、その上にハードメープルのリングで挟み込むという独自の技法を採用。これにより溶接時の歪みが巧みに吸収され、同時に表面のうつくしさも保たれます。ハードメープルの木理の優しさとホワイトブロンズメッキの落ち着きが互いの調和を保つ絶妙なバランスに注目してください。

CODE | NI-01  
 SIZE | W.550 × D.370 × H.500  
 MATERIAL | Top: White Bronze Plated Steel & Maple  
 Base: White Bronze Plated Steel



## LOOPER

古典的な「蛇腹」構造を採用したこのプロダクトは、日常に溶け込む構造体を再解釈し編集することで、アートピースとしても捉えられる存在に昇華させました。金属加工の精髓を凝縮し、熟練職人の手によって生み出されたLOOPERは、大量生産による既製家具では決して得られない深みと存在感を放ちます。装飾を極限まで削ぎ落としたミニマルなデザインは、そのシンプルさのなかにも圧倒的な印象を残し、観る者にデザインの繊細な所作を感じさせない、洗練された美を表現することに成功しました。これ以上の要素を引くことのできない、究極のミニマル構造が、このプロダクトの核です。

CODE | NI-02  
 SIZE | W.800 × D.275 × H.1090  
 MATERIAL | Frame: Bronze Plated Steel & Solid Oak





**CRAFTSMANSHIP**









## 溶接により創り出される複雑な形状のアート

ゆるやかな曲線を描くフレーム、生物のように躍動するカーブを持つ脚。金属で構成されるEDITORAのチェアやテーブルは、金型を使って一体型に成形することは困難です。必要となるのは職人による溶接と仕上げの技術。それらが独自の構造やデザインを結実させ、EDITORAの個性を確定させます。職人の手は、機械では再現できない微細で複雑な形状を生み出します。一見するとひと繋がりに見える金属ロッドも、曲げ部分と直線部分を溶接により仕上げることで、ひとつ

のフォームとなります。機械では曲げることができない形状も、細分化されたパーツを溶接で繋ぎ合わせることで、想像を超える美しい形状へ昇華するのです。経験を積んだ職人の中でも熟練度を試される技術はこれだけにとどまりません。平面の図面から立体を想像する力、どこに何が必要か、適切な部材を専門工場から集めるディレクション力が、プロダクトの最終形態を迎えさせます。EDITORAの家具は、型にはまらないデザインと、それを具現化する日本最高峰の職人技の結晶です。



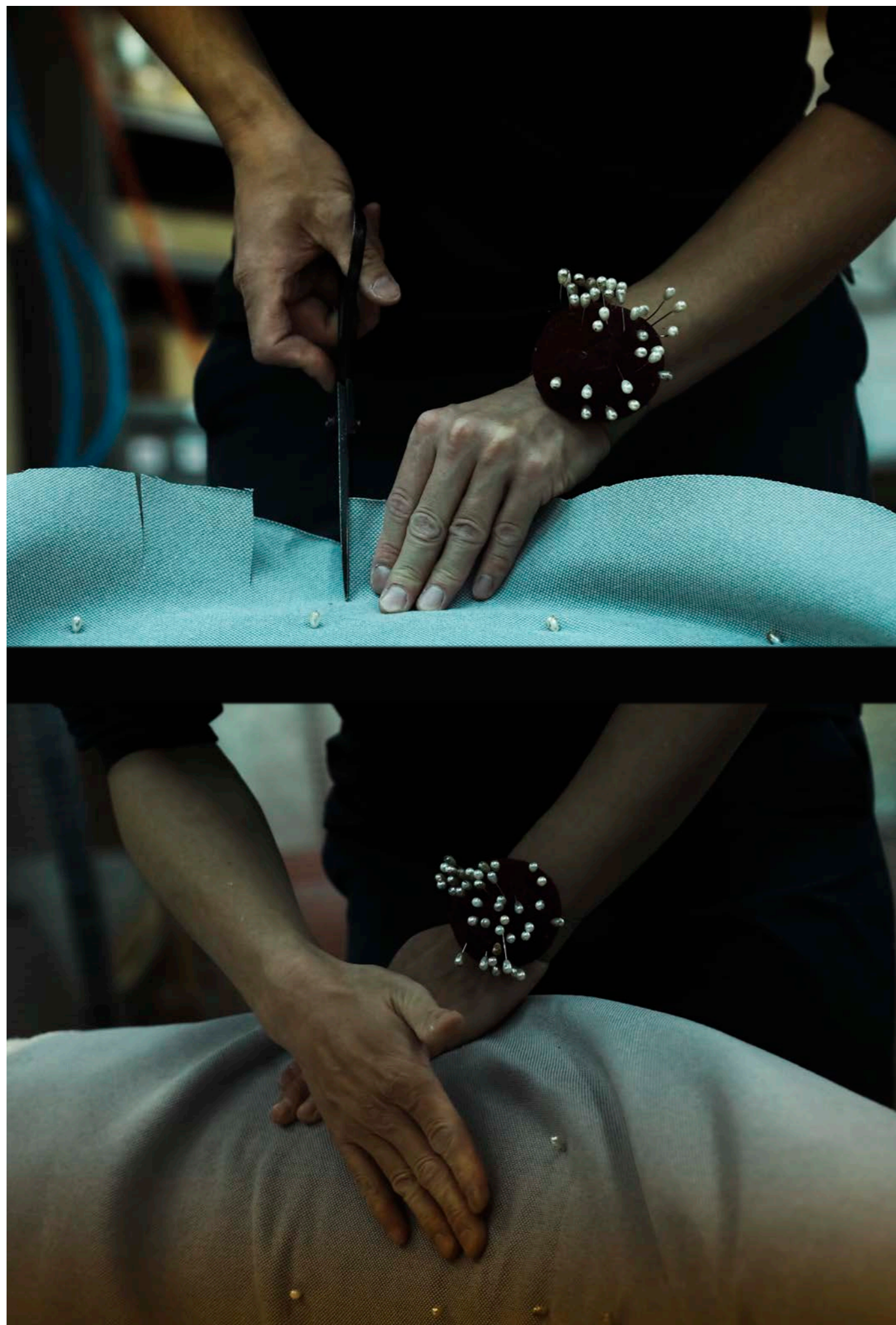










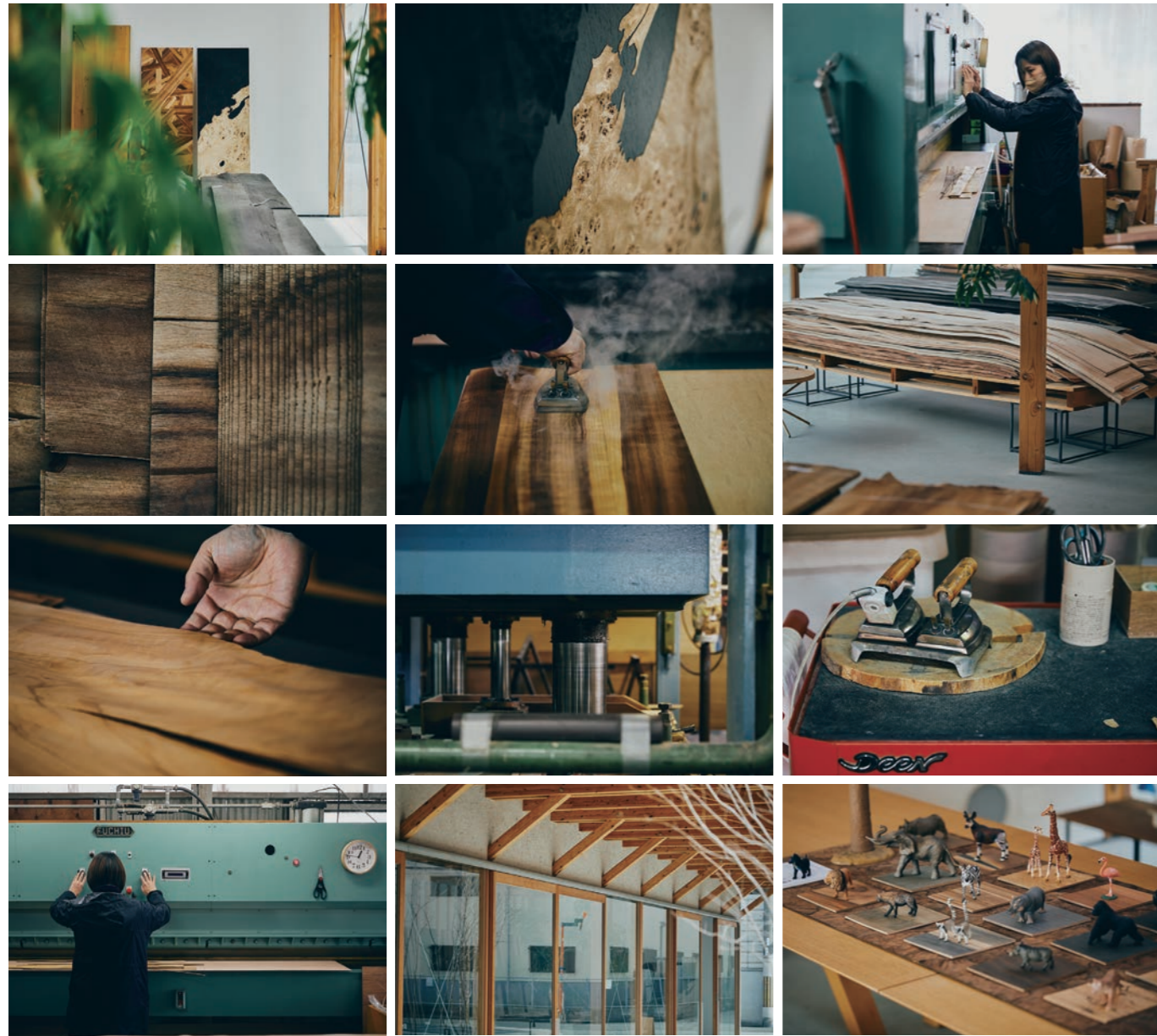


### 知見と経験、磨かれた職人の感性が圧巻の造形美を削り出す

有機的でふくよかな曲線を擁するソファとチェア。それらの独特のフォルムを具現化するため、EDITORAは金型成形ではなく、構造内部の木枠づくりから始まり、その上に肉付けを行う伝統的な工法を選びました。平面的な図面から想像し、立体の美を創造できるのは、職人の感性と経験の蓄積でしか成し得ません。曲線の角度や曲面が持つ肉感、総体としてのボリュームと迫力がどれくらいなのか。まだ見ぬ立体をデザイナーと意識を共にし、ウレタンの塊をゼロから削り出していくのです。その行為は彫刻作品の制作そ

のものです。そして生地を裁断し、座面背面に施す張りによって、EDITORAの家具は完成します。機械に頼ることなく、技術とアイデアで勝負する職人の存在が、斬新な曲面を持つプロダクトを生み出しました。世界の超一流家具を見てきた蓄積、デザインやファッション、建築や音楽などさまざまな文化を吸収してきた職人の感性が、唯一無二の家具を創り出すのです。1950年代に確立されたクラシカルな製法は、EDITORAの思想と日本最高峰の職人の技が繋いでいきます。





## 自らの足で世界を歩き選び抜いた天然木の突板

EDITORAのテーブルやキャビネットの表面に用いられるのは、天然木の化粧合板です。化粧合板とは、木を薄くスライスした突板を基材に貼り付けた意匠素材のこと。EDITORAはこの表面素材である突板に並々ならぬこだわりと心血を注ぐチームに製作を依頼。既製品を仕入れて販売する従来の手法とは一線を画す彼らのショールームには、国内はもとより世界中に自ら足を運びその目で選び抜いた天然木の突板が並びます。中には4000年前の湖底に眠っていた突板も。豊富な樹種の在庫ロットから、プロダクトのイメージに合

ったロットを選び出し、熟練の職人の手によって組み合わせられていく特別な素材たち。突板どうしの繊細な合わせや色のバリエーションは、自然の美しさと独特の手触りを最大限に活かすスペシャリストたちの意図的な選択です。それは、独自性を突板デザインの完璧なマッチングを追求する彼らの高い技術と情熱の証。すべての製品は、徹底的な対話に基づいて一枚一枚製作されます。大切な資源である木を、必要な量と必然のデザインで。完成した天然木の化粧合板は、同じものは2つとない、唯一無二のピースとなるのです。



## 手作業と最先端の技術が共鳴するEDITORAの木製椅子

EDITORAが誇る木製椅子ラインナップは、圧倒的な規模の製造体制をもつ20名の熟練職人たちの力を借ります。職人たちは5軸NCルーターを巧みに操り、複雑な形状でも美しい仕上がりの家具をつくり出します。5軸NCルーターは、同時に5つの軸を制御することで、あらゆる角度からの加工を可能にします。これにより、椅子の脚や座面、背面など、EDITORAの独特な形状を持つパーツが、高い精度とうつくしい切削肌で削り出されます。この自由な動きを実現するためには、職人の緻密

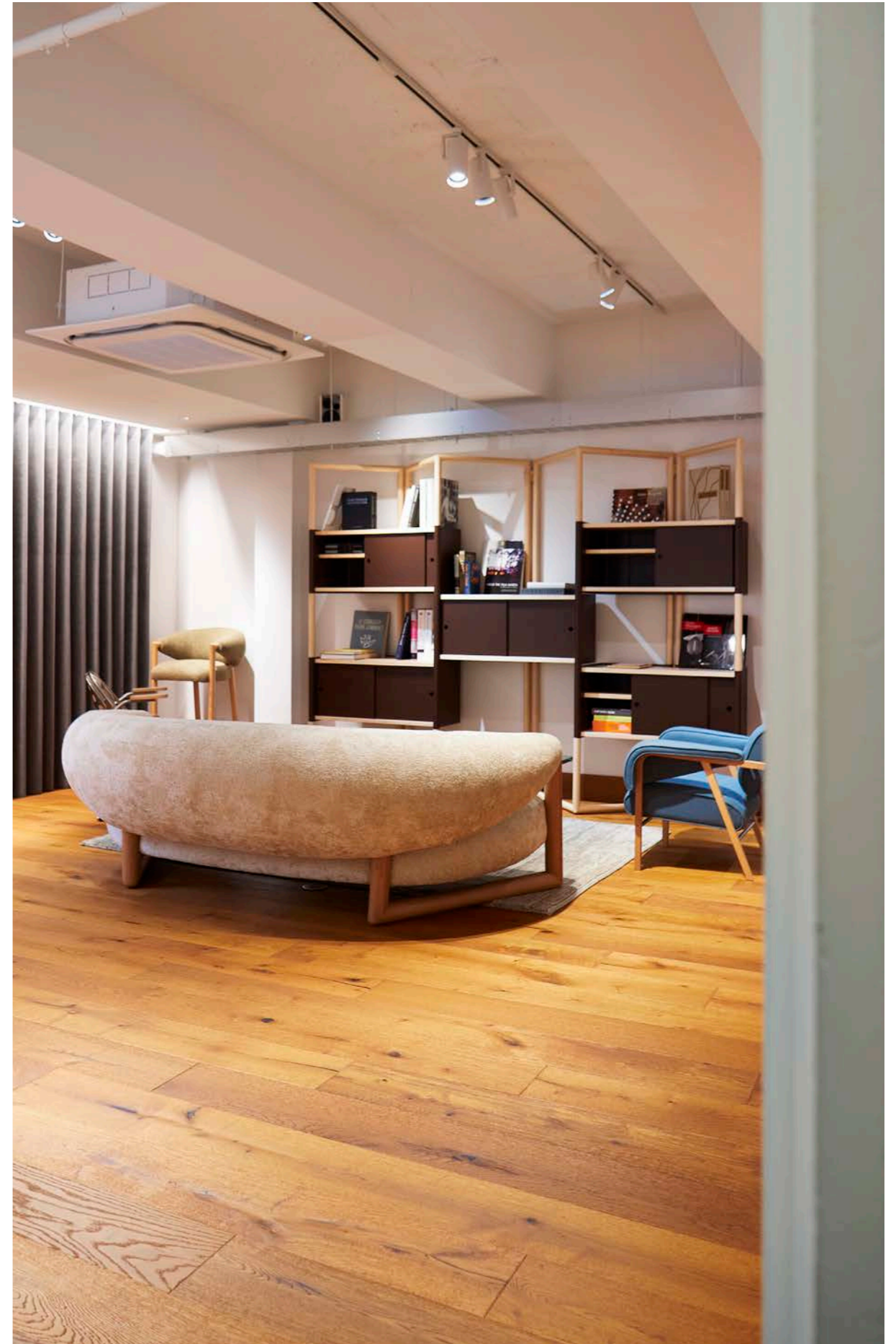
な数値設定とプログラミングが不可欠です。彼らは削り出される最終形を予想し、数値に置き換えるのです。そして、削り出されたパーツを組み立てたあとは、職人の手作業の出番。張地の採寸、裁断、縫製、そして張りまで、一連の作業を一貫して行います。これは彼らの強みであり、高品質な家具の製造には欠かせません。EDITORAは、職人たちの技術と情熱に信頼を置き、依頼をします。完成した家具は信頼性、使いやすさ、うつくしさを兼ね備えています。



# SHOWROOM

東京・日本橋。ビジネスの中心地にある私たちのショールームは、江戸時代からつづく歴史と伝統のなかにあります。大規模な再開発により生まれ変わるこの地で、EDITORAのコレクションを体験してください。実際に触れることで、EDITORAの世界観をより深く感じていただけるはずです。

※ショールームは完全予約制です。ご予約は以下の方法で承ります。  
お電話：03-6380-9968  
メール：info@editora.jp  
EDITORA SHOWROOM  
住 所：〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-7  
営業時間：11:00am - 6:00pm (土日祝休)







## MAKE AND SEE

2-1-7 Nihonbashikayabacho Chuo-ku Tokyo 103-0025 Japan  
<http://www.makeandsee.jp/>

### PHOTOGRAPHY

Reiji Yamazaki  
(P.2-3,P.6-7,P.11-13,P.16-18,  
P.22-23,P.28-29,P.41,P.44,P.82-89)

Kei Mizushima  
(P.10,P.14-15,P.19,P.20-21,  
P.24-25,P.27,P.30-31,P.34-35,  
P.38,P.42-43,P.46-47,P.49,P.50,  
P.52-54,P.57-58,P.60-62,P.65-67,  
P.69-70,P.72-74,P.76-77,P.93-94)

Riku Ikeya  
(P.36,P.48)

Shinji Serizawa  
(P.78-79,P.81-83)

Masami Idota  
(P.91)

Masuhiko Machida  
(P.90)

### ILLUSTRATION

Hitoshi Kuroki

### EDIT&TEXT

Ado Ishino (E)

### ART DIRECTION

Yume Satou

### CREATIVE DIRECTION

Ado Ishino (E)

### SPECIAL THANKS

The Aoyama Grand Hotel  
Timber Crew  
Dianaism

EDITORIA Edition 2024

<https://www.editoria.jp/>

**EDITORIA**  
TIMELESS FUSION



